13課

12月24日

裁きの過程

安息日午後 12月17日

暗唱聖句

なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。（2コリント5：10、新共同訳）

なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。（2コリント5：10、口語訳）

今週の聖句

マタイ25：31～46、ダニエル7：9～14、1コリント6：2、3、2ペトロ2：4～6、マラキ3：19（4：1、口語訳）、黙示録21：8

今週のテーマ

聖書が明確に述べていることを一つ挙げるとすれば、裁きの事実があります。神は世を裁かれます。裁きに関する記述は、旧約聖書にも新約聖書にも多数あり、疑いの余地はありません。今日の世界では、正義があまりに欠けていますが、いつの日か必ず来るのです。

聖書は、神は「完全な知識を持つ方」（ヨブ37：16）であり、私たちの心の最も深いところにある隠されたことも（コヘ12：14）、「すべてをご存じ」（1ヨハ3：20）であると言います。私たちは、どんな人にも、どんなことでも隠すことはできても、神の御前に隠されているものは何一つないのです。

神は、人間1人ひとりの生涯を知っておられるのでご自身のために裁きは必要となされません。神の裁きは、天と地に住む被造物のためになされる神のはからいなのです。その過程は、ルシファーが天で初めに反逆し、世界に広めた（黙12：7～9）ために、宇宙的、かつ歴史的なものです。

今週私たちは、世の終わりの裁きの主な三つの段階について学びます。すなわち、再臨前審判、千年期の裁き、そして執行審判の三つです。その過程全体は、義人たちの擁護と悪人たちの第二の死をもって終わります。

日曜日　12 月 18 日　最後の審判

多くの人にとって、裁きは罪の宣告を意味します。それは裁きの一過程ではありますが、私たちが忘れてはならないのは、正しい者を擁護するという裁きの持つ積極的な側面です。事実、ダニエル書は終わりの時の裁きについて「いと高き者の聖者らが勝ち」（ダニ7：22）と言及しています。神の裁きの原則は、次の聖句が示すようにこの両面を含みます。「あなたは天にいましてこれに耳を傾け、あなたの僕たちを裁き、悪人は悪人として、その行いの報いを頭にもたらし、善人は善人として、その善い行いに応じて報いをもたらしてください」（王上8：32）。

問1　マタイ 25：31～46 とヨハネ 5：21～29 を読んでください。最後の審判における罪の宣告と擁護の概念について、キリストはどのように語っていますか。

ある人々は、「裁かれない」（ヨハ3：18）や「裁かれることなく」（同5：24）という表現は、キリストにある者にとっては、裁かれないことを意味すると主張します。しかし、これらの表現は、信じる者たちは裁きにおいて「罪を宣告されることはない」ことを意味するのであり、「罪を宣告されない」（同3：18）、「罪を宣告されることなく」（同5：24）と理解すべきです。

つまり、私たちの運命は今、生きている間に決まるのです。キリストにある者は、すでに裁きの時に擁護されることが保証されており、キリストにない者は、罪の宣告の下に留まるのです。裁きの描写の中で（マタ25：31～46）、キリストは山羊（悪人）だけでなく、羊（義人）の存在にも言及しています。使徒パウロの次の言葉は明解です。「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです」（2コリ5：10）。

裁きについて考えるとき、私たちは恵みによって救われ（イザ55：1、エフェ2：8～10）、信仰によって義とされ（創15：6、ロマ5：1）、そして行いによって裁かれる（コヘ12：14、マタ25：31～46、黙20：11～13）ことを心に留めておかねばなりません。裁きの基礎は、十戒に集約された神の道徳律（コヘ12：13、14、ヤコ1：25、同2：8～17）なのです。

私たちの行いは救いの経験の純粋さを示す外面的な証拠であり、そのために、裁きの時に評価される要素になるのです。

最後に、裁きは神が人を受け入れるか拒むかを決める時ではなく、――私たちの行いに現れる――神を受け入れるか否かの選択を、神が最終的に承認される時なのです。

月曜日　12月19日　再臨前審判

キリストがおいでになる前に行われる裁き、あるいは私たちが「再臨前」審判と呼ぶ概念は、聖書の多くの場所に見いだすことができます。

問2　ダニエル7：9～14、マタイ22：1～14、黙示録11：1、18、19、同14：6、7を読んでください。これらの聖句はどのように、天の法廷で行われる再臨前調査審判という概念に光を当てていますか。この裁きの特徴は何ですか。

神の民の再臨前調査審判という概念は、三つの基本的な聖書の教えに基づくものです。

第一は、義人も悪人も含めて、すべての死者は、終わりの時の復活まで無意識のまま墓に留まるという概念（ヨハ5：25～29）です。

第二は、全人類におよぶ普遍的裁きの存在です（2コリ5：10、黙20：11～13）。

第三は、第一の復活は義人に対する祝福された報いであり、第二の復活は悪人の永遠の死である（ヨハ5：28、29、黙20：4～6、12～15）という事実です。

これが意味するところは、全人類が裁かれるのなら、それぞれの復活に「先立って」裁かれるべきであるということです。なぜなら、その復活の際に、最後の報いを受けるからです。

ダニエル書は、再臨前審判の時と性質について理解する助けとなります。象徴的な2300日の後――1844年――に天の聖所は清められ（ダニ8：14をヘブ9：23と比較）、再臨前審判が始まります（ダニ7：9～14）。これらは別の形で表現された同じ出来事です。そしてその裁きで、「いと高き者の聖者らが勝ち」（同7：22）ますが、それは神の民にとっての良い知らせです。

マタイ22：1～14では、イエスが、婚宴が実際に始まる前に、婚宴に招かれた客の調査について語っています。

そして黙示録の、再臨前調査審判は、神の神殿で「礼拝している者たちを数え（る）」（黙11：1）ことであり、「神の裁きの時が来た」（同14：6、7を同14：14～16と比較）ことを宣言するものであると言われています。

天の裁きについての知識は、私たちの地上での生き方にどのように影響を与えますか。

火曜日　12 月 20 日　　千年期の裁き

聖書は、再臨において（1）生きている聖徒と復活した聖徒は共に「空中で主と出会う」（1テサ4：16、17）こと、（2）すべての聖徒は、イエスご自身が彼らのために天に用意された「場所」（ヨハ14：1～3）に住むために天に上げられること、そして（3）千年期の終わりにのみ新エルサレムがこの地上に降り、そして聖徒たちの永遠の家郷（ふるさと）になる（黙21：1～3、9～11）ことを語っています。ですから、この地上が荒廃したままにされる千年期の間、聖徒たちはキリストと共に天で統治するのです（エレ4：23、黙20：4）。

問3　1コリント6：2、3と黙示録20：4～6、11～16を読んでください。なぜ聖徒たちは千年期の裁きに加わるのでしょうか。

裁きの過程全体は、（1）神は被造物に対して不公平であるとのサタンの告発に対して神のご品性を擁護するため、（2）義人たちへの報いの公平さを確かなものとするため、（3）悪人への罰の正当性を立証するため、そして（4）宇宙に再度反逆を引き起こす可能性のあるすべての疑いを葬ることを意図しています。義人たちの再臨前調査審判には、天使たちだけが関わります（ダニ7：9、10）。しかし、悪人と堕落した天使たちの千年期の裁きには、聖徒たちも参加します（1コリ6：3、ユダ6、黙20：4～6）。

再臨前調査審判は、1844年に「王座が据えられ……裁き主は席に着き／巻物が繰り広げられた」（ダニ7：9、10）時から始まりました。しかしながら、千年期の裁きは、聖徒たちが天に上げられ、座に着き、裁きが彼らに委ねられたのちに始まり、再度、天の書物が開かれ、死者は「これらの書物に書かれていることに基づき、彼らの行いに応じて裁かれ」（黙20：4、12）ます。この過程では、聖徒たちが天の書物を照らし合わせて神のなされた裁きがすべて公正であることを確認する機会となります。神は、全人類に対して、人々の意志決定に基づいて相応しい報いを与えられるだけでなく、その理由も説明されます。

眠っている失われた者たちが再臨を見るために復活する前に、救われた者たちが裁きの過程に参加すること、そして私たちも神の正義と公正さを見るまでは誰も罰せられないことは、どのように神のご品性を物語っていますか。

中世の時代には、神を厳しい懲罰を好む裁判官として描く傾向が強くありました。今日、神は、その子らを決して罰することのない愛情に満ちた寛大な父として描写する傾向にあります。しかし、義のない愛は混乱と無法に陥り、愛のない義は抑圧と征服に陥ります。神の裁きの過程は、義とあわれみが完全に融合し、そのどちらも神の無条件の愛に由来しています。

執行審判は、人類史における神の最終的かつ不可逆的な懲罰的な裁きです。制限的な執行審判はこれまでにも行われました。例えば、天から追放されたサタンと反逆した天使たち（黙12：7～12）、エデンの園から追い出されたアダムとエバ（創3章）、大洪水（創6～8章）、ソドムとゴモラの滅亡（創19章、ユダ7）、エジプトの初子の死（出11～12章）、そしてアナニアとサッピラの死（使徒5：1～11）などがあります。ですから、人類史の最後にも、悪人の執行審判があっても不思議ではありません。

問4　2 ペトロ 2：4～6 と同 3：10～13 を読んでください。これらの聖句は、最後の執行審判の性質を理解するための助けとなり、裁きが永遠に続くのではなく、裁きが完結するという思想をどのように示していますか。

「神の民に対する善意と長い寛容、その忍耐とあわれみは、神がそのご要求に従うことを拒む罪人を罰することを妨げるものではない。神の聖なる律法を犯す人間は、神を動かすことはできない。人間は、御子をお与えになった神の大いなる犠牲によってのみ赦されるのである。神の律法は不変であるがゆえに、神は人間の罪のために御子を死に渡されたのである」（エレン・G・ホワイト『原稿集』第12巻208ページ、英文）。

神は、人間を永遠の滅びから救うためにできる限りのことをなされ、多大な犠牲を払われました。失われる者たちは、最終的に不幸な結末に至る選択を自らが行なったのです。失われた者は（意識のある状態で永遠に苦しむのではなく）滅びますが、神の裁きは愛の神の品性に反するという考えはまったくの誤りです。神の愛、そして神の愛のみが義を要求するのです。

十字架そのものは、すべての人を救うために、神が喜んでなされたことについて私たちに何を教えていますか。

木曜日　12 月 22 日　第二の死

神は人間の歴史をその最終時代のクライマックスへと導いておられます。千年期の終わりには、すべての死んでいた悪人は墓からよみがえり、自分の行いに応じて最後の宣告を受けます（黙20：5、11～15）。こうして裁きのすべての過程が終わると、それ以上のことは何も起こりません。悪人たちは神の公正さを知ることになります。「大争闘のいっさいの事実が明らかになると、全宇宙は、忠誠な者も反逆者も、異口同音に、『万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります』と言明する」（『希望への光』1927ページ、『各時代の大争闘』下巻457ページ）。「そして今、サタンはひれふして、自分の上にくだった判決が正しいことを認める」（同1926ページ、同456ページ）。

問5　マラキ 3：19(口語訳 4：1)、黙示録 20：14、15、同 21：8 を読んでください。「火の池」と「第二の死」にはどのような効果があるのでしょうか。

サタンと彼の天使たち、そしてすべての悪人たちの滅びは宇宙を罪とその結果から清めます。しかしなお、悪人たちの最終的な滅びでさえ、それは神の愛の行為です。彼らは、罪を「焼き尽くす火」（ヘブ12：29）である神の御前に生きるよりは、死んだほうが良いからです。

「彼らはその清い場所から逃れたいと願うであろう。彼らを贖(あがな)うために死なれたお方の顔を避けるために、滅亡を歓迎するであろう。悪人の運命は、彼ら自身の選択によってきまるのである。彼らが天から除外されるのは、彼らが自ら進んでそうするのであり、神の正義と憐れみによるのである」（『希望への光』1862ページ、『各時代の大争闘』下巻293ページ）。

このように、罪と罪人の最終的な滅亡は、地獄での永遠の苦しみという非聖書的な理論とは対照的に、悪人が犯したどんな悪事に対しても、公正でふさわしい罰となるのです。それはまた、罪には始まりと終わりがあることを証明しています。その時、全宇宙は、罪、悪、そして決して正当化されることのない不服従が神秘のうちに起こる前にあった初めの完全な姿に戻るのです。

義人には不死を、悪人には永遠の滅びを与えるという公正な決定をくだされる「正しい審判者である主」（2テモ4：8）をほめたたえます。

神は最終的にはすべての人を救われるという考えは、どこが間違っていますか。なぜ、このような考えはよくないのでしょうか。

金曜日　12月23日　さらなる研究

参考資料として、『キリストの実物教訓』第24章「王の婚宴」、『各時代の大争闘』第42章「大争闘の終結」を読んでください。

「最後の審判の日に、失われた魂はみな自分が真理をこばんだことがどういうことであったかを悟る。十字架が示されると、罪とがのために心が盲目になっていた者がみな十字架の真の意義を悟る。神秘的な犠牲者イエスのカルバリーの光景を前にして、罪人は有罪の宣告を受ける。あらゆるいつわりの口実は一掃される。人類の背信はその憎むべき性格のままにあらわされる。人々は自分たちの選択がどんなものであったかを知る。長年の争闘における真理と誤謬の問題がその時明らかにされる。宇宙のさばきにおいて、神には罪の存在や罪の継続にすこしも責任のないことがわかる。神の律法は罪の幇助ではないことが実際に示される。神の統治には欠点がなく、不満の原因はなかった。すべての人の心の思いが明らかにされる時、神の忠実な者たちも反逆した者たちも声をそろえて、「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありましょうか。……あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからであります」と宣言する（黙示録15：3、4）」（『希望への光』691、692ページ、『各時代の希望』上巻47ページ）。

話し合いのための質問

❶ **「自我に固執して、意志を神に従わせようとしないなら、あなたは死を選んでいるのである。罪は、それがどこに見いだされようとも、神は焼き尽くす火である。もしあなたが罪を選び、罪から離れようとしないなら、罪を焼き尽くす神の臨在が、必ずあなたを焼き尽くすだろう」（『希望への光』1149ページ）。この引用文はどのように執行審判の性質を理解する助けとなりますか。**

❷ **（火曜日の研究で学んだ）贖われた者たちが、裁きの過程に参加した後でなければ、失われた者は1人として最後の裁きにあうことはないことを考えてみてください。このことは、私たちに神の裁きの開示性と透明性をどのように示していますか。愛が統治する宇宙において、この透明性はなぜ重要なのでしょうか。**

❸ **千年期の裁きへの聖徒の参加は、どのように愛する者が滅びるのを受け入れる慰めとなるでしょうか。**

アンゴラでの二つの夢

教会に行くたびに、ウィリアム・フレデリコ・ジョアオ・ランボ少年は、説教者が同じフレーズを言っているのを聞いているようでした。アンゴラの教会の講壇に立つ大きな説教者は、片手を空中に上げて叫ぶのです。「神様に仕えるために生きていない者は、生きるに値しない！」と。

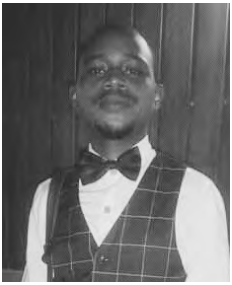
その言葉は、少年の心に大きな印象を与えましたが、教会の外の世界からも大きな印象を受けた彼は、教会に行くより踊ることを選びました。14歳のとき、彼はダンスグループを作り、パーティーや学校行事で踊るようになったのです。

ウィリアムはダンスを楽しんでいましたが、何かが正しくないように思いました。彼は虚しさを感じ、あの説教者の言葉を思い出しました――「神様に仕えるために生きていない者は、生きるに値しない」。ダンスの喜びは消え、彼は喫煙と飲酒をするようになりました。彼はますます虚しさを感じ、ある日、必死に祈りました。「私は、あなたに仕えて生きていません。生きるに値しない者です。助けてください！」

お祈りして間もなく、友人がメモリースティックをくれました。ウィリアムは、そこに保存してある友人が踊っている動画を見たかったのです。ところが、そのメモリースティックには説教も入っていて、それがウィリアムの心に触れました。彼はひざまずき、赦しを求め、教会に行く決心をしました。コロナのために多くの教会が閉じていたので、アドベンチストの家の教会に行きました。

大きな驚きがウィリアムを待っていました。家の教会のリーダーであるフィリップは、二晩にわたってウィリアムについての夢を見ていたのです。最初の夢は、フィリップが大きな木の隣に立って小さな枝を持っており、その枝を再び成長させるために大きな木につなげる必要がありました。次の夢は、彼が大きな川のそばに立っており、その隣に流れる小さな川と大きな川をつなげる必要がありました。

「あなたは、大きな木につながる必要のある小さな枝です」と、フィリップはウィリアムに語りました。「大きな木は、命の木であるイエス様で、あなたは小さな川です。そして、大きな川はイエス様です。あなたは、命の川であるイエス様とつながる必要があります」



ウィリアムは自分の耳を疑いました。「イエス様は、私につながってほしいのですか」。ウィリアムが家の教会で礼拝すると、虚しかった彼の心を平安と喜びが満たしました。彼はイエス様だけにつながる決心をしました。現在、ウィリアムは、これ以上ないほどに幸せです。彼は神様に仕えるためだけに生きています。

（アンドリュー・マクチェスニー）